



地域史研究の意義と課題 : 神戸史学会50周年と落合重信

大国, 正美

(Citation)

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 11:5-8

(Issue Date)

2013-02-02

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004425>



地域史研究の意義と課題

—神戸史学会 50 周年と落合重信—

2013年2月2日 大国正美

神戸史学会の誕生—「市民同友会」(1948~1993) 神戸に市民社会の実現をめざした

- 1947年 「むろうち文化協会」=長田区の市営住宅の住民たちの集まり
例会や見学会(1年半で35回) / 講師派遣 / 書道教室や洋裁講習、合唱練習
- 1948年 「市民同友会」に発展。教養を高め文化の向上、あるべき市民社会の確立
講話会、国際事情を聞く会、経済読書会、小説研究会、俳句講座など
- 1962年 「神戸史学会」発足。時の「市民同友会」会員400。会費1000円
「市民同友会手帖」(年2回)を「歴史と神戸」年4回に変更
印刷費を「市民同友会」が広告で賄い、会員に配布。
「ここ1、2年落合が出したい出したいと言っていた」(『市民同友会三十年史』)
「歴史に不得手…神戸市史編集室に勤めなければならなくなった…郷土史研究の雑誌でも出して…少しは郷土史関係のことを覚えられようか」(「歴史と神戸」119号「学歴ナシ」)
- 1969年 近現代に限定していた条件を解除。「古代の神戸」「小説の中の神戸」
年6冊の隔月刊行、学術刊行物、地方委員、バスツアー
- 1970年 例会開始
- 1973年 「市民同友会」の事務所から独立、神戸歴史資料センター構想の提唱
- 1974年 古文書調査班の活動開始。「神戸市文献史料集」
- 1976年 吉田南遺跡保存運動
- 1978年 神戸市の住居表示事業を批判、地名研究会を開設
- 1979年 100号記念で神戸史学会賞創設、兵庫県内に拡大、偶数月に発行。

落合重信の足跡

- 1912年 三重で生まれる。3歳で神戸に。「父は仲仕でスラム街に住む」。
- 1918年 神戸市兵庫区で米騒動体験。
「あのへんーたい、スラム街であったが、私たちのいた小路からは当夜出かけたものはなかったように記憶している。あの群衆にも多少の地域性があったのではなかろうか」(「歴史と神戸」16号「代々貧乏ぐらし」)
- 1925年 病気で県立三中を3カ月で中退
- 1928年 信用組合で給仕をしながら県立夜間中学講習所を卒業
- 1935年 神戸市立図書館勤務、以後商工会議所図書室
- 1942年 『神戸和歌史』出版
地方文化運動に共鳴し大政翼賛会の文化担当者として県内の組織作りに関与
- 1945年 兵庫区で空襲に遭う。自転車で炎の中を逃げまどい九死に一生。加東郡に疎開、応召
- 1947年 神戸市文化課勤務。長田区の町内会事務所に居住、のち市営住宅に転居
「私の給料より、母が赤ん坊を背中に負ってび賃搦きの方が収入がよかった」(「歴史と神戸」16号「代々貧乏ぐらし」)
- 1950年 兄の落合長雄と神戸の小字収集を開始。条里復元へ
- 1955年 明石の条里復元を公表
- 1956年 「条里制開拓と地方豪族」の論文公表。喜田貞吉の説を批判
雑誌「市民評論」刊行

- 1958年 神戸市史編集室勤務。『神戸市史』第三集の編集に当たる
この直後から神戸史学会の創設と雑誌発行を構想、必要に迫られた歴史研究
- 1970年 神戸市退職。市史資料室嘱託
- 1995年 82歳で死去

めざしたもの—「神戸史学会綱領」から

- 一、いままでの地方の歴史研究は、「温故知新」といいながらも、あまりにも保守的にすぎたようです。歴史研究は過去のことを調べることによって、未来への展望を可能とする進歩的なものでなければならないと信じます。
- 一、神戸の歴史研究をもっと身近かなものにするため、わたくしたちが現に存在する開港以後の現代史に重点をおきます。またそれが将来の歴史資料になるという意味において、現在のルポルタージュもふくめます。
- 一、神戸の歴史研究誌として学術的価値あるものにするのを念願しますが、それと同時に、多数の市民が参加する「生活の中の歴史」を書きしるしてゆくことにも努力します。
- ・「保守」への批判＝未来の可能性を展望／1904年発足の「神戸史談」との違いを意識
- ・身近に＝開港以降の現代史、ルポルタージュも（目次＝資料1）
神戸の米騒動で最初の特集、終戦、明治維新など近現代史に
「(各地の郷土史研究には) 近現代史がない…郷土史が古いところしか扱わないとなると、ますます一般社会から相手にされないものになっていくおそれ」（「歴史と神戸」132号編集後記）
- ・学術的でありながら市民が参加する「生活の中の歴史」
「多数の市民が参加する『生活の中の歴史』を書き記していく努力」（「歴史と神戸」67号「郷土史研究誌とは何か」）
- ・専門家と連携しながらアカデミズムの議論とは無縁
1964年に大阪歴史学会近代史部会と特集。中心人物は空襲や公害を研究した小山仁示さん／労働運動史や社会運動史に限定しないテーマ設定
「近代史研究会というのは多く明治どまり、現代史研究会というのは労働運動・社会運動に限られる。学会の潮流への顧慮があるようだ。その点歴史家のいない本誌は自由だ」（「歴史と神戸」1970年）
- ・資料公開の重要性（1968年には明治5年までの貿易統計表を紹介）

落合重信の研究の背景

- ・必要に迫られた歴史研究＝生活と結びついた歴史／従来の郷土史は知りたいことに応えてくれない
- ・米騒動・空襲などの体験・大政翼賛会と戦争責任
「歴史と神戸」に先立つ雑誌「市民評論」（1956年）編集者コメントに戦争体験をつづる（資料2）
戦争体験／底辺の暮らしと民衆の正当性／生き方を探るベクトルとしての歴史研究
- ・市民参加（資料3、「歴史と神戸」78号「郷土史研究誌ということ」）
市民同友会で培われた思想性（創設のころは読者と企画）／「乗物の中でもゆうに読める文章」
「研究者仲間だけの雑誌」への批判
- ・研究者と一般読者の調和と史料や目録などの刊行（資料3）
「研究者が育ってきている」／「研究者と一般読者＝会員の調和」「能動的な会員」への期待
「てんから読めない」と自己批判…「郷土史を研究するための資料を共有財産とする」

今後の方向—「官学」からの自律と平等なパートナー

戦後の資料保存と地域史研究の総括＝史料の保存と活用は民間から「官学」による自治体史編纂へ
→文化行政の戦線縮小・民間の自律性低下・お国自慢への回帰の懸念
「答え」「結果」ではなく「問い」を見つける地域史研究—市民目線で地域の課題の掘り起こし
「官学」が市民と平等な立場での参画

資料1 「歴史と神戸」の目次

		■ 『歴史と神戸』	
		― バック・ナンバー ―	
欠1号	神戸の米騒動	28号	(合併号) 神戸からの報告
欠2号	開港前夜ものがたり	29号	
欠3号	神戸の終戦前後	欠30号	〈号数重複〉(別冊)
欠4号	資料・神戸朝鮮人学校事件	30号	明治初期の神戸貿易
欠5号	神戸手帖	31号	大阪特集Ⅲ
欠6号	明治初期の神戸	欠32号	消えゆく神戸の〈明治〉
欠7号	(別冊1)	33号	明治初期特集
欠8号	(別冊2)	欠34号	古代の神戸
欠9号	神戸の未解放部落	35号	西南戦争と神戸
欠10号	大阪特集Ⅰ	36号	小説の中の神戸
欠11号	神戸の米騒動Ⅱ	37号	関学大闘争の記録
欠12号	神戸の港湾労働	欠38号	別冊Ⅰ(神戸町名解説)
欠13号	(別冊1)	39号	兵庫の北風家(一)
欠14号	別冊2(湊川新開地特集)	40号	日本海員組合をつくった人々
欠15号	(別冊3)	41号	大阪特集Ⅳ
欠16号	神戸人物誌	欠42号	神戸市域の村々
欠17号	神戸海運史の一側面	43号	明治特集
欠18号	終戦20年	欠44号	戦後の港湾労働
欠19号	歴史随想	45号	兵庫の北風家(二)
欠20号	(別冊)	欠46号	大正期の神戸
欠21号	鈴木商店の破綻と昭和金融恐慌	欠47号	兵庫県下の私鉄
欠22号	大阪特集Ⅱ	欠48号	神戸市域の村々(二)
23号	戦後20年の文学・美術史	欠49号	「神戸の歴史」1
欠24号	神戸の華僑	欠50号	神戸の農村舞台
		欠51号	大正期の神戸(2)
		欠52号	「神戸の歴史」2
		53号	大阪特集Ⅴ
		54号	帝国酸素五十年
		欠55号	未解放部落史の研究
		欠56号	撰播の農村舞台
		欠57号	「神戸の歴史」3
		欠58号	神戸人物誌(2)
		欠59号	神戸高速鉄道成立史
		60号	労働運動史上の賀川豊彦
		61号	三木地方の幕末・維新
		62号	撰播の農村舞台(2)
		欠63号	「神戸新しき村」・「神戸の歴史」4
		欠64号	大逆事件と神戸
		欠65号	大阪特集Ⅵ
		欠66号	神戸・明石関係考古学文献目録
		67号	須磨寺の古記録
		68号	撰播の農村舞台(3)
		69号	「神戸の歴史」5
		欠70号	神戸の外国人墓地
		71号	神戸歴史散歩
		72号	徳川道史料
		73号	神戸外国人居留地略史
		74号	撰播の農村舞台(4)
		75号	「神戸の歴史」6
		欠76号	大阪特集Ⅶ
		77号	白川村の中世
		78号	(会員名簿)
		79号	神戸の坂
		80号	播州歌舞伎の資料
		81号	「神戸の歴史」大正編1
		82号	岸百艸集(歴史随想)
		83号	神戸朝鮮人学校事件(2)
		84号	神戸の風水害
		85号	加古川水運史
		86号	神戸の農村舞台(2)
		87号	神戸地方史研究文献解題
		88号	近世の播磨歌壇
		89号	大阪特集Ⅷ
		90号	長田の歴史
		91号	神戸図書出版史
		92号	撰播但の歌舞伎芝居
		93号	「神戸の歴史」大正編2
		94号	神戸図書出版史2
		95号	『神戸又新日報』史
		96号	神戸市小字名集
		97号	「神戸詩人」事件・但馬の農村歌舞伎
		98号	「神戸の歴史」大正編3
		99号	大阪特集Ⅸ
		欠100号	播磨特集
		101号	明治初期特集(二)
		102号	100号総目次総索引
		103号	特集・兵庫県の農村舞台
		欠104号	特集「神戸の歴史」大正編4
		105号	特集華僑の風俗

資料2 「市民評論」(1956年) 編集者コメント

戦争のおとした影が、私のうちからなかなか消えない。戦争中、翼賛会というようなところへ進んで奉職したりした経験のためかも知れない。

いまの自分のものの考え方というものは、戦争を抜きにしては考えられない。これほどハッキリとして、自分のうちに歴史——過去が現在を支配していることを見せられながら、自分の従事している歴史研究が、こうも現在から浮いてしまいがちなのはなぜだろうか。

それは「昭和史」を書くということでもないし、古代史をマルキシズムの法則で割切ってみせることもない。もっと、現在に生きる人間に密着し、現在生きるのにそのまま役立つような、歴史研究の方法というようなものが、今の歴史研究とは別にあるのではなからうか。このごろしきりにそういうことが考えられてならない。

落合 重信

資料3 「歴史と神戸」78号「郷土史研究誌ということ」

郷土史研究誌ということ

☆ 郷土史を研究しようというのだから、それに郷土の多くの人が参加してくれなくては意味がない。その点『歴史と神戸』は、多くの郷土史研究誌が研究仲間だけの雑誌になっている中で、珍しく多数の会員を擁していて、ありがたいことだと思っている。

しかし、機関誌を発行してゆくのだから、書き手||研究者がなければならぬことももちろんである。問題は、その研究者と一般読者||会員をどう調和させてゆくかである。

☆ 郷土人としてたれしも郷土の歴史は知りたいたいと思う。そしてそれを教えてくれる唯一の場所であろう。そして、郷土史研究誌についてみると、そこには、まったく読めそうにもないことばかりが書いてある、というのが多くの郷土史研究誌の例であろう。

その点、『歴史と神戸』は乗物の中でもゆくに読める文章を、ということを目標にしている。読む気がかかっても、どうしても読み通せなかったというような独善的な文章は一つもなかったはずであり、全体としての展望が持てるように「神戸の歴史」を連載したり、各号を特集スタイルにしているのも、読者へ少しでも郷土史研究を近づきやすいものにしようという

努力のあらわれとみていただきたい。また各区を巡回して史跡講演会を開催したりしている。

☆ しかし、会員の方も、ただ受身でいるだけでなしに、できれば積極的に研究に取組む姿勢も示してほしいのである。研究などというとむずかしく聞えるが、一定の目標をもって、その目標にそったものを多く見てまわることからはじめられるのではなからうか。郷土史研究のテーマは無数にある。先達とよく話し合ってゆけば、研究の道はいくらも開けてゆくのではなからうか。

☆ 『歴史と神戸』も創刊一五年経っている。はじめは一人の書き手もなしの出発だったけれど、今では内部にいく人かの研究者が育ってきつつある。

ところが、研究ともなれば、はじめから初心者向きの啓蒙的文章を書くことはできない。精一ぱい自分の研究の正確を期するより仕方がない。そのところは、会員の方でも、自分たちのグループから研究者が育ってゆくものとして暖かい目でみてほしいのである。

☆ 今まで『歴史と神戸』の中にも、史料集に類するものがあって、てんから読めないというものもいくつかあった。これは郷土史を研究するための資料を共有財産とするためのものだから、将来のために見守ってほしいのである。(落合重信)